

2026年2月11日

## 「ショイグー体制下のロシア NSC の動向 ——ヴェネディークトフ安保会議副書記に注目して」 (ロシア研究会コメントリーNo. 9)

防衛省防衛研究所地域研究部主任研究官  
長谷川 雄之

### 「玉突き人事」とショイグー安保会議書記

ロシアによるウクライナ侵略は、まもなく5年目を迎えるとしている。その間、ロシア内政上の大きな動きとして、2024年3月の大統領選とこれに続く5月の第2次ミシュースチン内閣の発足がある。ミハイル・ミシュースチンは、2020年1月、新型コロナウイルスの感染拡大直前に、ドミートリ・メドヴェージエフに代わり、首相に就任した。この際、メドヴェージエフは、ロシア連邦安全保障会議<sup>1</sup>の副議長（新設ポスト）に配置転換となった。第2次ミシュースチン内閣において、最も注目を集めた人事発令は、ウクライナ戦争下におけるロシア国防大臣の交代であるが、政治的影響力という観点からは、ニコライ・パートルシェフ安保会議書記の大統領補佐官への配置転換である。一連の「玉突き人事」の起点は必ずしも明らかではないものの、パートルシェフに代わりセルゲイ・ショイグーが安保会議書記に、ショイグーの代わりにアンドレイ・ベロウーソフが国防相に就任するなど、クレムリンの高官人事には大きな変化が見られた。

パートルシェフは、プーチン大統領にとって1歳年上の国家保安委員会（KGB）の先輩で、最側近として強い政治的影響力を發揮し、国家機関としての安保会議の存在感を高めてきた。それだけに、およそ16年ぶりの安保会議書記の交代は、政治エリート研究としては、重要な人事発令である。新たに安保会議書記に就任したショイグーは、軍事技術協力庁を監督することとなったほか<sup>2</sup>、ウクライナ戦争下において、国防相として政治的に重要な局面で平壌を訪問し、安保会議書記としても訪朝を継続している。ショイグー安保会議書記は、2024年9月13日、2025年3月21日、6月4日、同月17日の4度にわたり訪朝しており、ロシアの対北朝鮮外交においてプレゼンスを発揮している<sup>3</sup>。一方で、大統領補佐官となったパートルシェフも2024年8月に新設された海洋参議会議長として、ロシアの国家海洋政策に深く関与しており<sup>4</sup>、彼も継続して要職にあると言えよう。

こうした中、ショイグー体制下の安保会議において、幹部職として存在感を強めているのが、アレクサンドル・ヴェネディークトフ安保会議副書記である。

<sup>1</sup> 諸外国の国家安全保障会議（NSC）に相当する。

<sup>2</sup> *Российская газета*, от 12 мая 2024г., «Шойгу будет курировать ФСВТС».

<sup>3</sup> Собз РФ, <http://www.scrf.gov.ru/news/allnews/>

<sup>4</sup> 長谷川雄之「ロシア海洋参議会——造船・海軍戦略・海洋調査」ROLES REPORT, No. 50, January 2026, pp. 1-8.

## ヴェネディークトフとは？

アレクサンドル・ヴェネディークトフは、1978年10月13日、モスクワ生まれの47歳で、2001年に外務省附属モスクワ国際関係大学（MGIMO）を卒業後、外務省に入省した。2007年まで外務本省、在外公館に勤務し、その後、クレムリンに異動した外務出身の「若き官邸官僚」である。安保会議で参事官、首席参事官、局長、書記官と順調に出世し、2016年12月には安保会議の事務方トップである書記の補佐官に就任し、2019年2月に副書記に昇任した<sup>5</sup>。第2次安倍政権下では、日本の国家安全保障局とロシア安保会議の協議が開催されていたが、ヴェネディークトフ副書記も度々参加し<sup>6</sup>、インタビュー記事では「安全保障会議のラインでの日本のパートナーとの交渉において、常に日米の軍事協力に係るテーマが関心の中心にある」と述べるなど<sup>7</sup>、当時のパートルシェフ書記の右腕として、外遊に同行していた。なお1歳年下であるが、同じく2001年にMGIMOを卒業したアレクセイ・シェフツォーフも外務出身の安保会議副書記であるが、ロシア農業銀行や対外経済銀行への出向期間が長い人物である<sup>8</sup>。

## 「友好国」との関係強化

2025年9月30日、モスクワで開催されたインドのカウンターパートとの定期協議では、ヴェネディークトフ安保会議副書記は、インドの国家安全保障担当首相顧問補とともに議長を務め、南アジアと中東の地域情勢、ウクライナ情勢、上海協力機構（SCO）やBRICSといった多国間枠組みについて議論を交わした<sup>9</sup>。12月には、プーチン大統領によるインド公式訪問が予定されていたから、もっともこの会談は、首脳会談の事前調整という特性を持っていたと推察される。

また、インドとの定期協議を前にして、9月17日にヴェネディークトフは、国際安全保障問題に関するロシア・ベトナム作業部会全体会合に参加し、ロシア代表団を率いた。ベトナム代表団の团长は、公安省次官が務め、全体会合では法執行機関・特務機関のラインで二国間協力、「カラー革命」への対抗、情報セキュリティ分野、アジア・太平洋地域における状況を中心とした地域問題などについて議論が交わされた<sup>10</sup>。12月にはショイグー安保会議書記がベトナム、ラオスを歴訪しており<sup>11</sup>、上述のインドと同様に、ヴェネディークトフ副書記の活動は、その事前調整の性質が強いものと考えられる。なおモスクワで開催されたロシア・ベトナム作業部会全体会合の直前、ヴェネディークトフ副書記はショイグー安保会議書記に同行して、イラクを訪問している。ロシア安保会議書記として初のイラク公式訪問となった<sup>12</sup>。

## おわりに

このように外務出身者のヴェネディークトフ副書記は、より前面に出て、ショイグー書記を外交面で支える役割を担っているようだ。ただし、現在のロシア外交の本丸である米露関係における安

<sup>5</sup> 長谷川雄之『ロシア大統領権力の制度分析』慶應義塾大学出版会、2025年2月、220頁。

<sup>6</sup> 防衛研究所編『東アジア戦略概観2020』2020年2月、136-137頁。

<sup>7</sup> Соббез РФ, <http://www.scrf.gov.ru/news/allnews/2522/>

<sup>8</sup> 長谷川『ロシア大統領権力の制度分析』、220頁。

<sup>9</sup> Соббез РФ, <http://www.scrf.gov.ru/news/allnews/3867/>

<sup>10</sup> Соббез РФ, <http://www.scrf.gov.ru/news/allnews/3862/>

<sup>11</sup> Соббез РФ, <http://www.scrf.gov.ru/news/allnews/3922/>

<sup>12</sup> Соббез РФ, <http://www.scrf.gov.ru/news/allnews/3861/>; 第1回ロシア・アラブサミットの準備会合と見られるが、情勢変化をうけて、同サミットは延期となった。

保会議の存在感は必ずしも強いとは言えない。そこでは、キリール・ドミートリエフ対外投資・経済協力担当大統領特別代表やユーリ・ウシャコーフ外政担当大統領補佐官、そしてエース級の外務官僚が集う大統領府外交政策局が存在感を強めている<sup>13</sup>。外交チャンネルの多様化や複雑化、言い換えれば、プーチン大統領に近い「インナーサークル」における一定の役割分担を見出すことができる。

「シロヴィキ本流」のパートルシェフ書記時代は、安保会議は、上からの強い統制力に特徴づけられてきた。ショイグ一体制下の安保会議は、パートルシェフの築き上げてきた安保会議の基本的な機能を踏襲しつつも、より政策調整の場として活用されていると言えよう。

※本稿に示された見解は、執筆者個人のものであり、所属機関の見解を代表するものではない。

---

<sup>13</sup> 長谷川雄之「ロシア大統領のリーダーシップ——外交政策の統制メカニズム」『国際安全保障』第53巻第2号、2025年12月、48-60頁。